

## 茶道体験会開催報告（2022年11月19日）

駒澤大部会会員  
小島賢治(三井物産OB)

当日は天候に恵まれ、駒澤大学深沢キャンパス内にある日本館に6人の留学生が参加してくれました(台湾1名、韓国2名、フランス2名、フィンランド1名)。

10時半からまずは隣接する離れの「而今庵」(にこんあん)を見学しました。このお茶室は三畳台目の典型的な利休様式です。

最初に飛び石の説明から。欧州のシンメトリー(対称的)な造園に比べ、日本では意図的にランダム(ふぞろい)な配置を。例えば踏み石も同様で、ふぞろいゆえ下を見て注意しながら歩かざるを得ません。そして茶室のそばに来て初めて目を上げ前を見ると画面がパッと開けます。これが日本の美意識なのです。といった説明をしてから、躍り口(にじりぐち)より茶室の中へ。

茶は奈良時代に中国から伝来しますが、最初は薬用でした。その後、室町時代に入り、村田珠光(じゅこう)、武野紹鷗(じょうおう)を経て、千利休により茶道として体系化されます。いわゆる「わびさび」の世界です。その典型がこの茶室です。質素な土壁、竹の骨組みと天井。そして茶道は、お茶を飲む作法ばかりでなく、茶碗、掛け軸、生け花、などのトータルなセッティングによる最大限のおもてなしの表現世界なのであります、と解説。これが済むと、大広間に戻り、茶道具の説明に。特に熱が入ったのが茶杓(ちやしやく)です。すべて私の自作品なので自然と解説にも力が入ってしまいました。

さて、11時15分からは薄茶をたてる体験教室です。見よう見まねで各自頑張りました。おいしかったとのことで全員2度目に挑戦。今度は皆さんちょっと上手になってカップチーノ的な泡立ちになりました。参加会員から菓子皿やお茶菓子(干菓子)の差し入れもあり、ぜいたくな薄茶体験ができました。

最後のアトラクションとして、やはり会員のご手配で、「投扇興(とうせんきょう)」と「貝合わせ」など、日本の遊びの体験も致しました。われわれも初体験のことにて場が大変盛り上がりしました。

ということで予定した12時になり、無事終了となりました。留学生たちもさぞかし喜んでくれたと思われます。

会員の皆さんには道具の拝借など大変お世話になりました。

本当にありがとうございました。心より御礼申し上げます。

---

### 茶道体験会参加感想文

駒澤大学交換留学生  
(韓国、東国大学)  
キム シラ(金 時羅)

元々韓国にいた時からお茶は好きで、今回本場の茶道の体験ができる機会を得て本当にうれしいと思いました。

自分でお茶を入れて飲むことだけではなく、茶道に関する伝統的なことを色々教えてくださってとても記憶に残る思い出になったと思います。特に日本館にある茶室の構成を自分の目で一つ一つ確認しながら説明を聞いて「茶道」という文化が日本の歴史とも密接な関係があることを理解しました。茶道の時、客の出入口は現世と別世界の結界の役割で、主人の出入口とは違うというところも印象的でした。特に体験会の日には他の交換留学生さんと偶然に白い靴下をはいて行きましたが、会員の方からそれが礼儀だと言われて、新しいことを学べたと思いました。

茶道の体験の前に茶器についても説明を聞きました。茶碗が種類によって値段が別々だとは知っていましたが、宝として保管されているのもあることは初めて知って驚きました。

普通、抹茶といえばアイスクリームとか、お菓子の味の印象が強かったのでそのままの抹茶はどんな感じが気になりましたが、思ったより甘くない味だったと思います。なので会員の方が準備してくださった甘いお菓子を一緒に食べて、相性が良かったとおもいます。

抹茶の粉とお湯を混ぜることは難しかったんですが、むしろその過程を通じて一一口がより大切に感じられました。

いろんな事を学べたと思います。ありがとうございました。

以上



(感想文筆者は前列右から2人目)



(茶室にて小島講師より茶道講和)



(広間に戻り茶道具の解説)



(茶碗の持ち方を教わり、さあこれから薄茶をたてます)